

「輪（わ）」の異変

はんざわかんいち

1

「輪（わ）」という1音節の和語（元からの日本語）を知らない日本語話者はほとんどいないでしょう。しかし、日常的にどの程度使うかとなると、個人的に使う機会はあまりないのではないのでしょうか。あるとすれば、せいぜい名詞としての「輪ゴム」、あとは某グループの歌詞にもある「輪になって踊ろう」のような表現くらいかもしれません。

ここでは、この、知っているようで案外知らないと思われる「輪」という言葉そのものについて、考えてみたいと思います。

まずは、何はなくても、国語辞典での説明を見てみましょう。

世界最大の日本語収録語数を誇る『日本国語大辞典 第二版』の「わ【輪・環】」の項目には、名詞の語義として次の7つが挙げられています。なお、語源には諸説あって未詳です。

- ①まるく曲げたもの。また、まるい形のもの。また、その形。
- ②車の左右にあり、軸の周囲に回転して、車を進める円形の具。車輪。
- ③桶などの箍（たが）。
- ④厄よけまじないの「ちのわ（茅輪）」のこと。
- ⑤屋根の石が転がって落ちないように、竹木をまるく曲げて、その上に石を置くもの。
- ⑥紋所の名。蛇の目輪、菊輪、毛輪、唐草輪などの種類がある。
- ⑦指輪のことをいう。てきや仲間の隠語。

この辞典の語義の掲載は歴史主義の方針をとっていて、該当例の古い順に

(2) 「輪(わ)」の異変

なっています。それをふまえると、「輪」という語の意味変化については、次の3点が指摘できます。

第一に、①と、その後の②以降では語義のレベルが異なるという点です。

つまり、①が一般的・抽象的な意味であるのに対して、②以降は個別的・具体的な意味ということです。言い換えれば、②以降はすべて①の語義に含まれる、提喩的な転義つまり「輪」という総称によって、それに含まれる個別を示す用法となります。

現代の一般的な国語辞典は古い順ではなく、基本的・中核的な意味を第一に掲げ、それから派生的な意味を掲げるのが普通です。たとえば、近年の『三省堂現代新国語辞典 第六版』（三省堂、2019年）では、

- ①細長いものをまげて、その両端をつなげたもの。また、その形。
- ②車の軸のまわりを回転させる、まるい形のもの。車輪。
- ③おけなどのたが。

のようになっています。

多少説明のしかたは異なるものの、掲載方針の違う『日本国語大辞典』の①～③とほぼ重なっていることが分かります。『日本国語大辞典』の④以降の語義が示されないのは、現代語としてはその用法がもはや認められないからでしょう。

第二に、①の語釈自体の中にもレベル差があるという点です。

「また」という接続詞で3つがあたかも対等のように並列されていますが、「まるく曲げたもの」と「まるい形のもの」とでは、曲げるという過程を経るか否か、この二者と「その形」では物か否かという点で異なります。つまり、説明された順に一般化・抽象化しているということです。

①に挙げられた用例を見ると、平安時代から明治時代にかけて、「耳の輪」（平安：金光明最勝王経）→「糸をわにまげて」（平安：宇津保物語）→「太このわに手をかけ」（室町：わらんべ草）→「輪を廻はし」（明治：小学読本）→「輪を描いて」（明治：田山花袋・田舎教師）のように出ています。

これらを見る限り、必ずしも「まるく曲げたもの」→「まるい形のもの」→「まるい形」という順に対応するわけではありません。

第三に、②以降は何らかの用途を持つ物体を表わすという点です。逆に言えば、①の説明の最後にある「その形」自体を表わすという点での抽象的な意味の派生は示されていないということです。

それぞれの「もの」は、実際に用途があるから「輪」という名称を必要としたのでしょうか、もともとは「～(の)輪」だったのが「輪」単独でもそれぞれの場面あるいは文脈で通用するようになった結果と考えられます。これら以外でも「輪」と認められれば、同様の用法になりえたはずですが、必要の度合いや用例の有無によって掲出されるには至らなかったのでしょうか。

ちなみに、『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院、2014年）によれば、万葉集、竹取物語、伊勢物語、古今和歌集、土左日記、後撰和歌集、蜻蛉日記、枕草子、源氏物語、紫式部日記、更科日記、大鏡、新古今和歌集、方丈記、宇治拾遺物語、平家物語、徒然草の中で、単純語「輪」が用いられているのは、蜻蛉日記に2例、枕草子に1例、源氏物語に1例、大鏡に2例、平家物語に3例、徒然草に1例であり、計6作品に10例見られるにすぎません。しかも、意味分類としては、どれも分類番号14150〔輪・車・棒・管など〕という同じ項目つまり用具という具体的な意味でのみ用いられています。

2

「輪」の語義については、その語釈にも用いられている「丸(まる)」や「円(えん)」との違いも問題になります。類義関係となるのは、あくまでも形のありようを示すという点においてであり、「輪」と「丸」は和語、「円」は漢語です。

『新明解類語辞典』（三省堂、2015年）では、3語とも、自然、人間、文化の3分類のうちの文化に属するものの、「丸」と「円」が「学芸」関係であるのに対して、「輪」は「産物・製品」関係であり、意味分野が異なっています。そして、それぞれ次のように説明されています。

(4) 「輪(わ)」の異変

まる(丸) 円形・また、球形。

えん(円) 一平面状で、定点(中心)から当距離にある点の軌跡。

わ(輪) ①円形や円状のもの。(略)

②糸やひもなどの両端を結び合わせて円形にしたもの。

意味分野の異なりは、「丸」や「円」が抽象概念を表わすのに対して、「輪」が具体的な「もの」を表わすことによります。説明に従えば、「円」がもっとも抽象的、「輪」がもっとも具体的、「丸」がその中間ということになるでしょうか。また、「丸」が「球形」つまり三次元も表わしうるのに対して、「円」や「輪」は二次元に限られるという違いもあります。

ただし、この3語に共通する性質として押さえておきたいのは、「～を描く」と言うとき、どれもが使えるように、その輪郭に焦点があるということであって、その内側の如何つまり何かで埋められているか空白かは問われないという点です。

以上は、自然言語としての日本語に関してですが、言語としての性格が異なる、いわゆる手話語となると、事情がまた変わってきます。

『新日本語—手話辞典』(中央法規出版、2011年)によれば、「丸」と「円」は立項されているのに、「輪」は立項されていないのです。使用の頻度や範囲によるものなのかしらん。

手話語において、「丸」は「鉛筆で丸をつける」という具体的な動作を表現する場合として、「右手の親指と人差指を閉じて丸を描く」、「円」は「紙に円を描く」という、やはり具体的な動作を表現する場合として、「右人差指で大きく丸を描く」という動作で示されます。どちらも「丸を描く」という動作は共通するものの、用いる指によって区別しているようです。

約1万語を取めるという当辞典で、「輪」を構成要素とする複合語を検索しても、「ゆびわ(指輪)」しか見当たりません。しかも、それが示されるのは「左の中指また薬指を右手の親指と人差指ではさみ指輪をはめるようにする」という動作によってであって、指輪それ自体であり、当然のように「輪」にまでは分節されていません。音読みの「年輪(ねんりん)」で「りん」に

相当するのは、「深い」を表わす動作であって、木の切り口に見られる文様を表わすはずの「輪」にはまったく関係しません。

以上から推測するに、手話語で「輪」に相当することを表わそうとする際には、おそらく「丸」あるいは「円」で代用しているのではないかと思われます。

参考までに、英語とも比較してみましょう。

『新和英辞典 第五版』（研究社、2003年）には、「輪」に対応する英単語を、次の4種に分けて挙げています。

- 1 [円状のもの] a circle; [車輪] a wheel; [たが] a hoop
- 2 [両端を結んだもの] a circle; [ロープなどを] coil
- 3 [交流・連鎖] a circle 《of friends》
- 4 [新体操の種目・手具] = フープ

circle が全体的に「輪」にほぼ対応する語と言えそうです。しかも、「円」に対しても「丸」に対しても、第一に circle が挙げられているので、英語では、個別対象を表わす語あるいは複合語を別にすれば、「輪」と「円」と「丸」という、日本語のような区別はされていないようです。

なお、『新和英辞典』の3番めの比喩的な語義が、国語辞典の「輪」に示されていないのは、単独の用法としては認めがたかったからということなのでしょうが、じつはこれが後に明らかにするように、この語の変化として大問題になります。

3

今度は、「輪」を構成要素とする複合語を挙げてみましょう。

「輪」を前項とする一般的な複合語としては、次のようなものがあります。

輪-つか・輪-ゴム・輪-磁石／輪-飾り・輪-投げ・輪-回し・輪-乗り・
輪-切り

(6) 「輪(わ)」の異変

スラッシュより右は、動詞の名詞形が下接した語ですが、それぞれの動作と「輪」との関係が異なっています。「輪飾り・輪投げ・輪回し」は、輪になっている物を使った動作であり、名詞下接の「輪ゴム・輪磁石」の「輪」も同様で、これらの場合、英語では、circleではなく、ringで表わします。

これらに対して、「輪乗り」は馬に乗って輪を描くように回ること、「輪切り」は、円筒形の物を横にして垂直に切ることをいいます。ただし、その切り口の内側をくり抜くわけではないので、「胴切り・筒切り」とは違って、輪郭に焦点を当てた用法です。これらを「円切り」や「丸切り」と言わないのは、具体性を重視してのことかもしれません。

後項となる複合語は、次のとおりです。

腕-輪・首-輪・鼻-輪・指-輪・竹^{ちく}-輪・花-輪・金^{かな}-輪 / 咽喉^{のど}-輪・埴^{はに}-輪・
面^{おも}-輪

スラッシュより左の各語は、大きさや素材などは異なるものの、どれも輪の形つまりその物が円状で、かつ中が空洞のものをいいます。

スラッシュより右の「咽喉輪」は格闘技の技の一つで、相手の咽喉に手を当てて押すときの、その手指の構えから、「埴輪」は円筒形のものからとも、それを輪の形に並べるからとも言われます。「面輪」は顔の輪郭に焦点を当てた語ですが、どういう形かは問われません。

なお、「三輪(みわ、あるいは、みつわ)」や「五輪(いつわ)」のように、「輪」に数詞を冠した語もあります。元来は、3つあるいは5つの輪を少しずつ重ね合わせて出来た文様のことですが、今は地名や人名という固有名詞になっています。

オリンピックの邦訳としての音読みの「五輪(ごりん)」は、オリンピアという地名の由来とは何の関係もなく、邦訳する際、オリンピックの、そのような形をしたシンボルマークから発案されたようです。「オリンピック」の「オリン」と「ゴリン」の音が近いということも選ばれた理由の一つらしいのですが、さすがに訓読みの「いつわ」では「逸話」と紛らわしいからな

のか、避けられました。

「輪」を用いた、おもな慣用句としては、次のようなものがあります（語釈は『日本国語大辞典 第二版』によります）。

輪を描く（運動するものの軌跡が円い形をなす）

輪になる（多くの人々が、円い形に集まる）

輪を作る（人や物が、ある物を取り囲んで帯状につながる）

輪を吹く（口から吹き出すタバコの煙で輪を作る）

輪を掛ける（（ひとまわり大きくする意で）倍化する。一層はなはだしくする。さらに誇張する）

輪に輪を掛ける（輪をかけた上にさらに輪をかける意で、誇張した上にさらに誇張する）

最後の「輪を掛ける」と「輪に輪を掛ける」の2つを除いて、他は結果として輪という形になることを表わしています。そのうち、「輪を吹く」だけはその輪が煙草の煙に限定されるのに対して、他は「運動するもの」ならば対象を問いません。これらが慣用句として、「輪」単独の語義と異なっているのは、具体的である点は共通していますが、構成要素が離散的であり、かつ臨時的に、特定の用途に関係なく作られるという点です。

「輪を掛ける」と「輪に輪を掛ける」は、以上の慣用句とは成り立ちが違い、結果として、輪という形は問題にされません。「輪を掛ける」がなぜ「ひとまわり大きくする意」となるかといえ、輪の内側が、それが掛けられる対象の外形と同じ大きさか、それより小さければ、掛けられないからです。

「ひとまわり」という幅は厳密ではありませんが、たとえば、鳥獣を生け捕りする「わな（罠）」の「わ」が輪に由来するように、その輪は獲物（の一部）が内側に抵抗なく収まるくらいの大きさがなければなりません。それが「ひとまわり」です。この「ひとまわり」分が「輪を掛ける」という表現として比喩的に転じ、「輪」の文字どおりの意味は失われ、言動が実際以上

であることを示すことになったわけです。

4

近代以降、「輪」がどのような用いられ方をしてきたか、その概容を知るために、公開されている電子コーパスを検索した結果を示してみます（調査にあたっては菊地礼氏の協力を得ました）。

まずは、「日本語歴史コーパス」(CHJ)で、明治～昭和という時代区分の、資料ジャンルを問わないデータを検索すると、複合語としては、「輪切り・輪かざり・輪ゴム」、「指輪・桶輪・太輪(の桶)・喉輪」があり、国語辞典に載るほどの、限られた範囲の具体物を表わす語が出て来ます。

それに対し、「～の輪」になると、「念珠の輪・鎖の輪・自転車の輪・車の輪」などの用途別や、「鉄の輪・銅製の輪」などの素材別のような、一般に想定される輪だけではなく、同じ具体物ながら「緑葉の輪・虹の輪・水の輪・波の輪」のような、自然現象に見られる輪、さらに「五七の輪・線状の輪・法の輪」のような、抽象性を帯びた輪など、さまざまに見られます。

いっぽう、語順を逆にした「輪の～」という形では、「輪の中(に入る)・輪の外(に出る)」という、閉じられた境界線の意を表わす例しか見られません。

動詞との関係では、「輪が出来る・輪が崩れる」、「輪ヲ頂く・輪ヲ転ばす・輪ヲ留める・輪ヲ数える・輪ヲはめる」や「輪ヲ描く・輪ヲ作る・輪ヲなす・輪ヲ重ねる」、「輪ニする・輪ニ作る・輪ニなる」や「輪ニ巻く・輪ニ取る・輪ニ吹く」など、名詞(句)に比べると、多様にあり、これらの「輪」はどれも具体物に関して、そういう形であることを表わしています。比喩的な表現として見られる、「輪のように曲がっている(フィラメント)・輪のごとく廻転する(松明)」や「眼のふちに蒼い輪が出来る・年輪に相当する輪・輪の小さな撫子」「鉢巻のような輪」なども同様です。

このような歴史コーパスに対して、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)の、雑誌や新聞という資料ジャンルに限った分野のデータを見ると、歴史コーパスの用例との違いとして次の2点が挙げられます。

第一に、「～の輪」という名詞句において、「～」に入る語に大きな違いがある点です。

「知恵の輪・金属の輪・孫悟空の輪・土星の輪・白黒の輪・茅の輪」など、個別には異なるものの、輪の形をした具体物を表わすという点で、時代データと共通する表現も見られますが、それにもまして目立つのは、「友達・友人・人（たち）・生徒・アメリカ人・チーム・知り合い・隣人同士・選手」や「友情・連帯・交流・助け合い・遊び・防災・支援・図書館・活動・NPO・歓喜」など、じつにさまざまな人間関係や人間活動という抽象的なことがらに関して「輪」が用いられるようになったことです。これは時代データにはまったく見られなかったものであり、先に予告した大問題です。

要は、連携・協力というつながりを「輪」によって表わすようになったということであり、それが現代になってことさらに叫ばれるようになったことが、新聞や雑誌という、世相を反映しやすい資料に如実に現れているということなのでしょう。

第二に、動詞との関係においても、第二点と連動するように、「輪が広がる・輪が出来る」、「輪を広げる・輪を壊す」、「輪二入る・輪に加わる」、「輪カラ離れる」など、物ではなく、人間関係を中心とした用法が中心になるという点です。

5

ところで、このような現代的な「輪」と同様に、近來さかんに耳にする語に「絆（きずな）」があります。

「絆」（古くは「きづな」）はもともとは、家畜などをつなぎとめておく綱のことでしたが、今その意味で使うことはないでしょう。現代の国語辞典でも「たちきることのできない、人間どうしの、つながり」という、原義から転じた意味しか載せていないものもあります。それにともない、「絆を強める」や「絆を太くする」のような、原義にも通じる表現だけでなく、「絆を深める・広げる」や「絆を豊かにする」のような、原義とは無縁の表現も流通するようになってしまいました。

「輪」のほうは、どうでしょうか。右に示した現代データの動詞句例のような、多くの人間によって形作られる「輪」は、その原義あるいは基本義から遠く離れてしまっている感じがしませんか。

具体的な行動としての「輪になる」なら、まだその円形というイメージは保たれているでしょうけれど、「友達の輪」や「友情の輪」などになると、単につながりというだけで、形のイメージは消えているように思われます。

それでも、そのイメージがなお生き延びていて、かつ「絆」との違いを挙げるならば、「絆」が直線的であるのに対して、「輪」は円として閉じたつながりということになりそうです。その良し悪しはともかくとして。

6

「輪」という言葉について、その意味・用法の歴史をざざっと見てきました。その中でもっとも大きな変化を挙げるとすれば、現代（第二次世界大戦後）になってからの、人間自身に関する使い方が次々に生まれ、それが主流になったということではないでしょうか。にもかかわらず、不思議なのは、その意味・用法がなぜか現代の国語辞典には、明確に他と区別される形では掲載されていないということです。

語の意味変化として、具体から抽象へ、物から人へという比喩的な変化が一般的と言われていきますから、「輪」という語についても、同様の経緯を辿ったとみなすこともできるでしょう。しかし、その変化はあまりにも急激であり、それ以前の自然な推移に比べ、ほとんど人為的と言えるほどです。

ただし、「友達の輪」はありえても、同じ意味での「友達の円」や「友達の丸」は成り立たないと思われます。その違いは、やはり「輪」が原義から維持している、具体性という意味的な性質ではないでしょうか。その性質は、「友達の輪」と「友達のつながり」を比べてみても、指摘できることです。つまり、「円」や「丸」とは違って、「輪」という語そのものに用法の変化を受け入れるだけの要因があったのではないかということです。

「輪して同ぜず」、とオチを付けるつもりはありませんけれどネ。